

『ニコラス・ニクルビィ』の挿絵

篠 三知雄

1

英国ヴィクトリア朝作家、チャールズ・ディケンズは、後に『ボズの素描集』として纏めた小品集の第1作「ポプラ通りの晩餐会」（「ミンズ氏と彼のいとこ」と改題）を『マンスリィ・マガジン』の1833年12月号に掲載して、2年3ヶ月後に初めての本格小説『ピクウィック・クラブ遺文集』を月刊分冊で発表し始めた。しかし、その後、間もなく、共同作業である挿絵画家のR. シーモーが心労のため自殺するという一大危機に直面した。これは新人作家としては死活問題であった。これをディケンズは多少の曲折を経た後、見事に乗り切った。そして、H. K. ブラウンとの共同作業『ピクウィック遺文集』は第4分冊以後人気は急上昇し、大成功であった。ディケンズは一躍人気作家となった。以後、ブラウンは23年間、15の主な小説のうち10の作品に挿絵を描いて、ディケンズの成功に大きく貢献した。『ピクウィック遺文集』の後半と並行して出版され始めた『オリヴァー・トウィスト』は出版社の都合で、G. クルークシャンクが担当したものの、『ニコラス・ニクルビィ』の挿絵は当然ブラウンが担当した。

ブラウンは若いながら豊かな才能と確かな技を持った銅版画家であったが、『ピクウィック遺文集』においては、中途からの交代であり、不慣れであって、月刊分冊の銅版画とその後の複製版では構図にかなりの違いが生じた。例えば、第10図の「馬車の転覆」では、分冊の絵でもピクウィック氏らの困難は察せられるが、複製版においてピクウィック氏の眼鏡がずり落ちそうになり、馬はまだ興奮気味に足をばたつかせ、逃亡者たちに向けられたウォードル氏の拳はより高く挙げる、といった活気のあるものになっている。第11図「サム・ウェラー君登場」でも、分冊において、サムたちと背後の人物との間に荷物の上に寝そべった男がいるが、背後の人物より小さく、不自然であった。それが別版では削除され、中庭に鶏を数羽配置し、変化を持たせている。第12図「ピクウィック氏の腕の中で気を失うバーデル夫人」も、夫人の倒れる姿勢と心配してピクウィック氏を蹴とばす男の子の構図にも分冊と別版では違いがある。第13図「イータンスウィルの選挙風景」の中央の市長の姿勢やその周囲で騒ぐ運動員たちの様子にかなりの違いがあり、第14図「レオ・ハンター

夫人の「仮装昼食会」、第15図「女子寄宿学校での突発事件」、第16図「留置場内のピクウィック氏」においても、こうした傾向は続くが、後半になるとその差違の振幅は少なくなり、線や陰影などの微細なものとなる。

『ニコラス・ニクルビィ』はそれに続くもので、その成果は関心をひく。幸い、下記の版を参照できたので、それぞれを比較したい。

Charles Dickens, *NICHOLAS NICKLEBY*, Reproduced in facsimile from the original monthly parts of 1838~9 with an essay by *Michael Slater* in two volumes (London: Scolar Press, 1982) (A)

Charles Dickens, *NICHOLAS NICKLEBY* (London: Chapman and Hall, 1839) (B)

J. A. Hammerton, *The Dickens Picture-Book* (London: The Educational Book Co. Ltd., 1910) (C)

Charles Dickens, *NICHOLAS NICKLEBY* (London: Chapman and Hall) (注:本書には出版年月は記されていないが、同版の『ボズの素描集』には1872の年号が記されている。) (D)

以上をそれぞれ、A、B、C、Dと便宜上して、検討したい。

2

『ニコラス・ニクルビィ』のブラウンによる挿絵の総数は、F. キトンによると63枚¹⁾、T. ハットンによると88枚²⁾。ただし、ハットンは表の解説で39の主題のうち、2枚版が23、3枚版が14としているので³⁾、1枚版は2となり、合計90枚となる。実際の表は1枚版4、2枚版21、3枚版14で、合計88枚である。筆者が、前記A、B、C、D版を比較した結果をハットンの表によって修正したものと106枚となる。2枚版13、3枚版24、4枚版2、計106。ヨハンセンによると、3枚版18、4枚版14、1枚版7、合計117枚という⁴⁾。4枚版が多いのは、より綿密な研究の成果として納得できるが、1枚版の7はハットンの表でさえ4であり、筆者の検討では第33図「ケンウィッグズ嬢床屋で大騒ぎ」だけであり、これもハットンによると3枚版になっていて、結局1枚版は0となり、ヨハンセンの研究も完全ではない。

合本初版の口絵はD. マクリースによる若きディケンズの最も端整で、作者自身も気に入りの肖像の部分的銅版画である。この肖像は晩年の住居ギャツヒル館の食堂に飾られていた。これは月刊分冊では第20巻の巻頭に載せられた。

第1図「ラルフ・ニクルビィ氏の落ちぶれた縁者への初訪問」。破産し、主人に亡くなら

れたニクルビィ母子が、裕福な義弟ラルフを頼って上京し、滞在中の下宿にラルフが訪ねて行く。本文にはないが暖炉の前でニコラスは叔父の帽子を受けとり、預かろうとしている。喪服のニクルビィ夫人はやっとの思いで椅子から立ち上って挨拶し、娘のケイトは母を支えている。暖炉の上部の壁には大鏡があり、その上には孔雀の羽根が数本立ててある。これは本文になく、ブラウンはG. クルークシャンク同様、虚栄と不幸を暗示する小道具に使っている。キトンはラルフの帽子が小さ過ぎると指摘している⁹⁾。ハットンの表では1枚となっているが、分冊(A)と70年代版(D)では大鏡に反対側の窓枠らしきものが映っている。初版合本(B)と絵本(C)のは淡く映り、炉棚には小さな筆立てのようなものに鉛筆が3本立ててある。従って、2枚あるが、全体の構図には大差ない。なお、ブラウンは『ニクルビィ』から、それまで使っていない、点線用ローラーを壁面、床の模様や陰影に使用し、線のみによる重苦しさを脱し、明るさ、軽快さを持たせている。

第2図「サラセン人の首亭でのヨーク卅の学校長」。悪徳校長がロンドン滞在中の定宿の暖炉の前で、校長のスクウィアズが羽根ペンの先を調べているところへ、1人の男が2人の義理の息子を厄介払いに入学させるため連れて、今来たところである。校長の眼が片方であるのが挿絵では不明瞭である。また、本文には羽根ペンのことは書かれていない。窓側の仕切り席にはその上に荷物を載せ、その上にちょこんと坐った、同じく不安そうな男の子が描かれている。その子の膝に掛けた衣類に‘PITY/LORD’(?)と書かれている。暖炉の上に大鏡、炉棚に数本の羽根ペンを入れた筆立て、‘PEDLAR’の字と絵の描かれたパンフレットか、広告の類が鏡に立てかけてある。他にメモが数枚はさんである。ロンドンの中心部で、安宿なので商売人の出入りも多いらしい。このあたりはブラウンの考えである。A、Dは同じだが、BとCは時計の横に献立表らしき張紙があり、時計の針は本文では3時半過ぎだが3時5分前を指している。ハットンの表は1。

第3図「ニコラス、ヨーク卅へ出発」。馬車発着場で、ヨーク行きの馬車の支度で、各人がそれぞれ忙がしい。ホテルの2人の女中は2階から下の駆者と話をしている、仕事はおろそかになり、近くで女中頭は怒鳴っている。これらは本文になく、ブラウンの観察から生まれたものであろう。すでに新入生とニコラスは安価な屋根席に乗り、ニクルビィ母娘は別れを惜しみ、ニューマンは親切にも主人のラルフに知られぬように手紙を手渡している。近くでラルフと校長は立話をしている。背景の建物の壁には‘FAST TRAIN, REDUCED FARES’とか、‘SPITFIRE’という名の高速馬車の絵のある張紙広告がある。AとBは同じで、CとDは同じだが、両者の構図は差がない。ハットンの表には2枚の記述。

第4図「ヨークの5人姉妹」。ヨーク寺院の「5人姉妹」と呼ばれているステンドグラスから生まれた物語が、馬車が事故で足止めされた時の気晴らしに、ある同乗の紳士によって語られた。時の流れとともに悲しい運命が巡って来るとも知らずに美しい5人姉妹が寺

院を背景にした庭で、刺しゅうとおしゃべりの楽しい時を過ごしている。そばにやや背を向けて修道士が娘たちを戒めるべく立っているが、その修道士の目をさえ楽しませるものであった。Aのみ違い、B、C、Dは同じ。川辺に遊ぶ水鳥と衣服の模様が多少違うだけで、構図は大差ない。ハットンの表も2枚。

第5図「ドゥザボーイ・ホール校内の儉約ぶり」。ニコラスが校長の案内で校内を見学すると、スクウィアズ夫人がしみとかびで汚れた教室で、教卓の上の大きな鉢に得体の知れない食物を生徒に一口ずつ食べさせている。食べた生徒は吐き気や腹痛を起し、列を作り待つ者たちは不安と嫌悪の表情で、活気がない。元気なのは一人校長の息子だけで、自分に靴をはかせるのに手間どっている年長の生徒スマイクに腹を立て、背を蹴とばし、わめいている。そうした混乱の中で、夫人はあくまで厳めしい表情をくずさず、機械的に食物を生徒の口に押し込んでいる。教卓の横に助手の机があるはずだが、見当らない。Cだけ違い、A、B、Dは同じ。ハットンの表も2枚の記述。両者に本質的な差はない。

第6図「ケイトがラ・クリーヴィ女史のモデルとなる」。美しいケイトは家主の細密画家のモデルになり、そこをラルフがこっそり覗きこんでいる。室内は画家のアトリエらしくたくさんの絵が壁にかけられている。背後には絵を描いているキューピット像があり、これはラ・クリーヴィ女史の心の内を示している。前面に2匹の猫が描かれ、一方が手を出し、じゃれている。これはラルフのケイトへの干渉を暗示する。キューピット像も猫のことも本文にはない。A、B、Dは同じ、Cは違う。ハットンの表も2。両者に差はない。

第7図「ニューマン・ノグズ、御婦人方をあばら家に置き去る」。主人ラルフに命じられてニューマンは母娘を出費節約のためラルフのあばら家に案内する。天井は破れ、窓ガラスはほとんど割れ、壁は汚れ、くもの巣は張り、ねずみまで出ている。合本の夫人はそれを見て目を丸くして驚ろいている。ねずみは本文にはない。ニューマンは申し訳なきそうにしている。AとDは同じ、BとCは同じ。ハットンは1枚としている。

第8図「ニコラスがスクウィアズ一家を驚ろかせる」。校長の折檻に我慢できず、ニコラスは笞を取り上げ、校長夫婦に打ちかかり、娘は箒を持って打ちかかり、息子は服の裾を引っ張り、引き離そうとしている。生徒たちは驚ろいたり、逃げまどったり、中には面白がって、けしかける者もいる。インクつぼが飛び交い、散乱している。ニコラスの振り上げた笞は娘の鼻の穴に入っているかのようである。娘は体の大きな女中さんのように描かれている。箒を振り上げる場面は本文にない。AとBは同じ、CとDが同じで2枚だが、ハットンの表では1。

第9図「ある家の家庭教師となったニコラス」。ヨークにいられなくなり、ロンドンへ帰ったニコラスは職がなく、ニューマンの紹介で、上流志向のケンウィッグズ家の娘たちの家庭教師となった。勉強中の4人の娘のそばで、伯父、友人の女優と満足気な夫人が見ている。前面には放ったらかしにされている赤ん坊は椅子で泣いている。本文では首のない玩

具の馬で遊んでいるが、絵では馬はひっくり返っている。AとCが同じで、BとDはそれぞれ違い、計3枚だが、ハットンの表では2。

第10図「マンタリーニ女史、ケイトをナッグ老嬢に紹介する」。ケイトがラルフの紹介でマンタリーニ洋装店で働くことになり、主任のナッグ老嬢など女店員に引き合わせられる。流行を売りものにするだけに、本文にはないが、しゃれた髪型や服装の店員たちがいっぱいいて、仕事の手を休めてケイトを品定めするために見たり、噂話を始めたりしている。ナッグ老嬢は主人にこびてケイトにも愛想よくしている。ケイトはつましく控えている。AとCは同じで、B、Dはそれぞれ違う。ハットンでは2となっている。髪型や衣裳の様子は違うが、本質的差はない。

第11図「ニクルピィ嬢、叔父の仲間に紹介される」。抜け目のない商売人ラルフは姪の美貌を商売に利用して、彼女を悪徳有閑集団に紹介する。叔父がケイトの手首を掴んで嫌がるケイトを同道させ、嘲笑したり、好奇の目で見たりしているならず者たちの真中にさらし者にした。炉棚には裸のヴィーナス像があり、ケイトの置かれた立場を示している。もう1つ、酒杯を持つバックス神と侍女たちの飾りのついた時計があり、これはならず者たちの意向を反映している。B、Cは同じだが、AとDはそれぞれ違い、計3枚だがハットンの表では2となっている。背景にかかげられた絵が違うだけで構図に差はない。

第12図「ラルフ・ニクルピィのやましきのない落着き」。ニコラスが妹に対する叔父のやり方を非難したとき、逆にニコラスのヨークでの行状を暴露し、ニコラスをいきり立たせる。ケイトとラ・クリーヴィ女史は彼をなだめ、夫人は落胆して、立つ元気もなく、椅子に坐ったままで、手を挙げて制止している。ラルフは手を前で組み、落ちついてニコラスを睨んでいる。BとDが同じで、AとCはそれぞれ違い、計3枚あるが、ハットンは2としている。

第13図「マンタリーニ女史の店での嫌がらせの専門家たち」。夫の賭博の借金取り立てのために悪党仲間が3人店にやってきて、店の商品を身につけて戯れている。マンタリーニ女史は恐怖と悲しみのために気絶してしまった。ケイトが気付薬で介抱している。CとDが同じで、A、Bも違う。ハットンでは3枚。合本(B)の中央のいかつい大男は婦人服を体にあてて立ち、すまし顔をしておどけている。

第14図「田舎巡りの座長の剣劇の練習」。ロンドンを離れて、南部地方へ文無しの旅をしているニコラスとスマイクが、人の好い宿の主人に紹介されて旅巡り一座の座長のところへ案内される。座長は座員の撃剣の練習を指導しているところで、ニコラスらを驚ろかせる。背後に階段があり、そこから宿の女中が顔をのぞかせている。その横の壁には座長の肖像画がかけられている。案内をしてきたはずの宿の主人が見当らないことはキトンによって指摘されている⁶⁾。AとCは同じ、B、Dは違う。ハットンの表も同じく3枚とある。背景の壁の絵は少し差があるが、騎上の主人と徒歩の従者、ドンキホーテ主従であろうか。

第15図「スネヴェリッチ嬢将来を囑望される」。一座の少女スターは大人気で、その時の劇場内の興奮を描いている。舞台上には花輪や花束が投げられ、熱狂した人の中にはハンカチや帽子、肩かけを振り、大声で声援を送っている。舞台に見とれた物売りは売物の入った籠を客にぶつけて睨まれている。二階正面には軍人がいて、周囲の騒ぎに驚ろいている。AとBとDは同じで、Cは違い、そこでは軍人に前髪がなく、その方が軍人のいかめしさがなくなり、面白味が出ている。ハットンの表も2となっている。

第16図「ニコラスのスマイクへの演技指導」。科白つきの役をもらったスマイクがさっぱり科白を覚えられず、舞台衣裳をつけたニコラスが指導する。ニコラスは向って左側に描かれていて、剣は手前側につけられているため、キトンは特に左ききの記述のないニコラスには反対側と指摘している⁷⁾。同じことは第23図のリンキンウォーター氏の左手に持った羽根ペンについても言えそうである。AとBとDは同じ、Cは違う。ハットンも2枚としている。

第17図「パイクとブラック両人の口説き」。ケイトを自分たちの自由にするために、悪党集団は御し易い母親を手はずけようとする。1人に手を握られた夫人はまんざらでもない表情で、もう一人はケイトの絵に千回口づけをしたと本文に書かれているが、それらしい絵は描かれていない。手伝いは使いに出されているはずだが、ここでは傍であきれ顔をしている。炉の前の猫は知らぬふりで、背を丸めてうずくまっている。これは夫人の行為の空しさを暗示するものだろう。AとBとDは同じ、Cは違い、2枚だが、ハットンは3枚としている。

第18図「ニコラス退団をにおわす」。素人ながらニコラスは一座の女性たちに励まされて人気者になったが、ロンドンの家族の事情が切迫していることをノグズ氏から知らされ、一座の人たちの前で退団をほのめかした。女性たちは驚ろき、涙を流して悲しみ、男たちは驚ろいたり、考え込んだりしている者もいるが、ほくそえみ、退団の知らせを喜んでいる者がむしろ多い。Aではこの挿絵がなぜかない。B、C、Dとも違い、3枚で、ハットンの表も3枚となっている。

第19図「ヴィンセント・クラメル座長の芝居がかった感情の吐露」。ニコラスがロンドンへ帰る馬車発着場での別れの場面で、座長は大袈裟にニコラスに抱きついている。足元の犬が逃げている様子でその激しさが分かる。婦人たちは大きな悲しみのため姿を見せていない。背景では大きな体の婦人たちが乗り込むのを男たちが助け、荷物にカバーをかける作業をしている男が、男性客のかつらを帽子もろとも跳とばしている。左手の建物の入口の上に‘COACH OFFICE’の字が書かれたランプがある。Bでは下部に小鳥らしい絵が描かれている。それはAやCにはない。入口横の壁面には‘REDUCED FARES, PORTSM(OUTH), ‘FAST…’。もう一方の側の壁面には、‘RAILROAD SPEED!… WINCHES(TER)…’などの張紙がある。Aはこの点あまり明確ではない。BとDは同じ、

A, C違うので3枚でハットンの表では2。

第20図「ニコラス、コーヒー店で妹の名を耳にする」。ロンドンに帰着し、コーヒー店で一息ついているところで、悪党仲間がケイトの名を口にしているのを聞き、ニコラスはその方を睨みつけている。背景の壁には大鏡の左右に『アラビアン・ナイツ』の情景が描かれ、話の内容の好色性が示されている。炉棚上にはワインの価格表が立てられている。BとCは同じ、A, Dは違い、3枚だが、ハットンの表では2。

第21図「ラルフの事務所でのマンタリーニ夫妻」。借金で動きがとれなくなったマンタリーニ氏がラルフの事務所ではじめに金を借りようとしている。ラルフはうしろ手に組み厳しい顔をして、相手の弱味につけこもうとしている。夫人はハンカチを手に、夫の不始末を訴え、その後方でマンタリーニ氏は大げさに嘆き悲しんでいる。その様子を戸のガラス窓越しにニューマンが見ている。本文にはないが、金貸しの事務所らしく、‘INTEREST TABLE’が壁に張ってあり、大判の‘LEDGER’が立てかけてあり、‘DEED’と書かれた書類の束が開き戸棚に見える。‘MOR…(抵当)’は逆書きになっている。AとBとDが同じ、Cは違う。ハットンの表も2。

第22図「ニコラスの知らせに嘆くケンウィッグズ氏」。ニコラスがケンウィッグズ家の伯父と女優との結婚を知らせると自分の娘たちへの遺産を望めなくなったケンウィッグズ氏は椅子から飛び上って立ち、大いに嘆き、4人の娘たちもけいれんを起したり、大声でわめき始める。乳母もいっしょになって怒鳴る。ニコラスと同席の医者はなすすべもなく見ている。炉棚の置物の猫と鶏はその様子をあきれて横目で見ている。暖炉の上の鏡の上に差した2本の孔雀の羽根も壁の目となって見下している。これはまた不運の象徴である。AとDは同じ、BとCは違い、計3枚に対し、ハットンは2としている。背景の綱に干された洗濯物や衣類の模様は少差があるだけで、本質的違いはない。

第23図「リンキンウォーター氏、ニコラスの採用に同意する」。雇用主のチアリブル兄弟のニコラス採用に対し、リンキンウォーター氏は心から同意する。チアリブル兄弟は腕を組んで、立ち、脚高の椅子に坐って事務机に向っているリンキンウォーター氏が体を兄弟の方に向けて話している。そばでニコラスが熱心に仕事をしている。頭上の鳥籠には一羽の小鳥がいる。やっと1人、身を置く場所ができたということであろう。リンキンウォーター氏は左手に羽根ペンを持っている。BとCが同じ、A, Dは違い、計3枚。ハットンの表では2枚。

第24図「双方ともに予期せぬ出合い」。スマイクは上京した校長父子と街でばったり会ってしまい、校長には傘の柄で襟首をひっかけられ、息子には脚にしがみつかれた。スマイクは街燈の柱にかじりつき連れ去られまいとしている。作者はこの時のスマイクの表情に驚ろきが足りないと不満を述べている。通りがかりの煉瓦職人が振り返り見て、また、毛布にくるまったもの売りもそれを見ている。作者は‘old Apple Woman’といっているが⁸⁾、

挿絵は男女判別しがたい。パイプをくわえたアイルランドの女性であろう。こんろの上にはりんごより小さいものが煙を出しているので同時に焼き栗も売っていると考えるのが妥当であろう。背景の家では‘FISHING TACKLE’の店があり、魚のかかった釣竿が目じるしにかかげられている。その2階は‘SEMINARY for YOUNG LADIES, FRENCH by a NATIVE’の看板がかけられている。また、‘BANK’の横文字の入った乗合馬車が他の馬車と競走している。車掌は後続の馬車をからかっているらしい。もちろん本文にはない、ロンドンでよく見る情景だったのでだろうが、馬に笞をあてているのはスマイクの恐怖心を表わすとスタイグは言っている⁹⁾。後方の建物には‘EMPORIUM’の看板が見える。CとDが同じ、A、Bは違う。ハットンも3としている。BではPhizの署名のZが逆向きになっている。

第25図「ニコラスの、名も知らぬ若い女性との再会」。ニコラスは事務所でチアリブル氏に膝まづいている女性が、好意を寄せていた人であることを知り驚ろく。あわてて、手にしていた手紙を落している。A、B、C、Dすべて違い、ハットンも4としている。

第26図「隣家の紳士がニクルビィ夫人へ胸の思いを打ち明ける」。娘子が庭をそぞろ歩きをしていると咳払いや塀をたたく音がして、玉ねぎやきゅうりなどが飛んできて、やがて初老の紳士が塀越しに顔を出し、夫人に愛を打ち明けた。ケイトは気味わるがりおびえたが、夫人は申し出を拒みつつも喜んでいるらしい。Dでは夫人は横目使いで、色っぽい。空では2羽の小鳥が愛をささやき、口づけをしている。AとBとCは同じで、Dは違う。ハットンの表では3となっている。

第27図「マンタリーニ氏の2度目の服毒」。借金でますます身動きできなくなったマンタリーニ氏は服毒自殺をはかる。ケイトをはじめ店員たちは驚ろいて、氏をとり囲んでいるが、夫人は涙を流すどころか、腹を立て、彼女の囲りにも店員たちが集っている。ラルフが丁度そこへやって来たところである。AとDは同じ、B、Cは違う。3枚のはずだが、ハットンの表では2。

第28図「スノーリィ氏、父性愛を大いに示す」。スノーリィ氏はスマイクと会い、大げさに親子再会劇を演じてみせる。ラルフが仕組んだものらしい。画面中央では氏はスマイクの頭を抱え、左手の帽子を大きく挙げています。ニクルビィ親子、ヨーク農夫ジョン夫妻、ラルフとスクウィアズ校長がそれを見ているが、ニコラスは顔をしかめている。スマイクは納得せず、同行を拒む。AとCは同じ、B、Dは違い、3枚。ハットンは2としてる。

第29図「ニコラスのブレイ氏初訪門」。ニコラスは好意を寄せる女性との親交を求めて、彼女の家に行くが、父娘とも歓迎しない。娘は陰気な部屋で仕事をし、病気の父は薬びんを傍の机において、暖炉の前で不気嫌に坐っている。入口の戸の陰の姿見の上に一羽の鳥のいる鳥籠がある。これは先の第23図のと同じく孤独を示している。AとBとDは同じ、Cは違い、2枚だが、ハットンは3としている。

第30図「密談」。ラルフと仲間のアーサーはニコラスの愛するブレイ嬢について、借金をたてにとって悪知恵を働かせている。ラルフは脚高の事務椅子に座り、アーサーは低い椅子に坐り、額を寄せて相談している。そのすきにニューマンは戸棚に入り、聴き耳を立てている。戸棚の扉はかなり開けられていて、気付かれぬか心配なほどである。AとBとDは同じ、Cは違い、2枚だが、ハットンは3枚としている。

第31図「小さな服を着た紳士の奇妙な訪門」。ニクルビィ母娘、チアリブル氏と甥のフランクのいる室に、奇妙な声が聞こえ、暖炉から男が降りて来た。チアリブル氏は火ばさみを持ち、待ち構えている。野菜を投げてニクルビィ夫人に愛を告白した隣家の老紳士であった。炉棚には花びんの花があり、その外側にも大輪の花らしい、造花のようなものがある。その花卉にあたる所には一方は笑い、一方は驚ろいたような表情が描かれている。これと似たのに『ドンビィ父子』の学校の散歩の時に揚げられていた風にも使われている。A、B、C、D、いずれも違うので4枚だが、ハットンは3としている。

第32図「マルベリ卿とその配下の者との最後のいさかい」。悪戯を重ねるうちに、そうした生活に飽きてしまった若い貴族との間に意見の相違が生じ、内輪もめが起った。その結果、首領格のマルベリ卿は若い貴族を殺してしまう。その争いを止めようとする者、巻き添えをくう者、囃し立てる者、別のテーブルでもカード遊びがもとで喧嘩をしている。AとCは同じ、B、Cは違うので3。ハットンの表も3。

第33図「ケンウィッグズ嬢、床屋で大騒ぎ」。床屋でケンウィッグズ家の伯父と長女が顔を合わせ、遺産をもらえなくなったことを知っていた少女が大声を出し、大伯父をののしった。ニューマンは居合わせてそれを目撃し、棚の上の仮髪用の人形の首も目を丸くして見ている。店の窓ガラスの宣伝の文字‘(HAIR DRESSING)’は外にはではなく、内側に向けられている。また分冊では髪型が整髪薬宣伝用のポスターの女性が顔しか見えない。A、B、C、Dとも同じだが、ハットンは3としている。

第34図「結婚当日の朝、アーサーを祝福するニコラス」。借金を理由に若いブレイ嬢との結婚を強要し、結婚式当日までこぎつけた老人アーサーはニコラスに激しく非難される。ブレイ嬢は恐ろしさで気が遠くなり、ケイトに介抱され、手伝いの中年女性は泣いている。この部屋の鳥籠、安楽椅子、鏡などの配置は第29図と違っている。AとC同じ、BとDは違い、計3で、ハットンも3。

第35図「スクウィアズ校長とスライダズキュー婆さんは客に気づかない」。アーサー老人の世話をしていた老婆が自分をさしおいて若い娘にうつつをぬかしたことに腹を立て、借金の証書などを入れた書類箱をアーサーの所から持ち去り、アーサーに借金をしていた校長はその中味を読む手伝いのついでに自分の証文を焼却する。二人はその作業に夢中になり、そこへフランクとニューマンがやって来たことに気づかない。BとDが同じ、A、Cは違い、計3。ハットンは2。

第36図「認知」。長い年月の労苦とケイトへの果せぬ恋はスマイクの心身をむしばみ、その回復のためニコラスの故郷で療養してゐる。そこへアーサーがちらりと姿を現わし、スマイクは彼こそ自分をヨークの学校へ連れて行った人であることを思い出す。その驚きの場面、それによって、彼がラルフが捨てた子であることが判明する。スマイクは間もなくこの世を去る。AとCは同じ。B、Dは違うので3枚。ハットンでは2。

第37図「マンタリーニ氏のなれの果て」。結婚したニコラス夫婦が街を歩き、ふと聞き慣れた声を耳にし、ある洗濯屋の店をのぞくとマンタリーニ夫妻が相も変わらず喧嘩の最中であつた。‘MANGLING DONE HERE’の看板が入口横に小さく書かれている。その位置は絵の構成上不自然な場所になっている。AとCは同じ、B、Dは違うので、3枚。ハットンは2としている。なおAでは第20分冊の巻頭に合本の口絵の肖像が載せられているので第37番目の絵となっている。

第38図「ドゥザボーイ校の崩壊」。校長の破滅がヨークの学校に伝わると生徒たちは校長夫人、娘、息子に対し反抗し、大混乱となる。夫人に大さじをつきつけ、いつもされてきたように食物を食べさせようとする者、息子を逆吊りにして、大鉢へ突込もうとしてる者、娘を追って帽子をとる者、それを囃し立てる者、解放を喜ぶ者などさまざまである。女性用帽子が3つ描かれているのは勇み足である。AとC同じ、BとD同じで、2枚。ハットンも2枚。

第39図「いとこの墓での子どもたち」。巻末にケイトの5人の子が従弟スマイクの墓のあたりでたわむれ遊んでいる。背後には教会があり、空には白い雲を背景に鳥が多数舞い飛んでいる。まさに、のどかな大団円の情景である。A、B、C同じ。Dは違う。ハットンも2としている。

以上のように、39の主題に対し、2、3枚、時には4枚といった別版があるが、『ピクウィック遺文集』と違って、この作品では構図の差違はあまりない。

3

『ニコラス・ニクルピィ』の挿絵として無視できないのは、月刊分冊の表紙絵である。これは第一分冊から使われたので、第一分冊の挿絵とほとんど同時に製作されたと考えねばならない。T、ハットンには‘Electro from the original/woodcut after ‘Phiz’>としている。スタイグはブラウンが製作した7つのうちの1つとしている。J、A、ハマーソンも‘from a design by Phiz’>としているのでブラウンの案と考えてよからう。そうすれば彼にとっては表紙絵の初めてのものである。後のものと比べると物語の内容を伝える点では弱く、その一部を暗示しているにすぎない。

ブラウンは題字をシーモアの『ピクウィック遺文集』をまねて木の枝のブロックで組ん

でいる。そして、上辺、左右側辺、下辺に絵が描かれている。上辺は地方の領主の館又は城を背景にした険しい山の道をイヴニングドレスを着た若い女性が目隠しをして杖を頼りに歩いている。その前方には1000とか500とか300という数字の書かれた金袋らしいものがある。その右側には岩にもたれて、右手で顔をおおって嘆いている若い男、左側には膝まずき、右手を咽の所をおさえている同じく悲しみを示している女性が描かれている。その上空には不吉な鳥があざ笑うかのように見下している。目隠しの女性をJ. A. ハマートンは‘Justice’(正義の女神)としているが¹⁰⁾、その一方の足は一つの車輪にかけられている。これは運命の糸車であろうから、これはスタイグのいうように‘Fortuna’(運命の女神)とする方が正しいであろう。これはホガースが1721年に製作した「富くじ」を検討することによって一層確かめられる。ホガースは裸体で、杖こそついてないが、目隠しをした、車輪の上に立つ、ほとんど同じ姿勢の「運命の女神」を描いている。そして、正義の女神は祭壇上に剣と天秤を持って坐っている。目隠しの女性も運命の糸車に片足をかけているらしい。もう1つ注目すべきことは女性の左横にある‘cornucopia’(豊饒の角)である。ホガースの「富くじ」の祭壇にもこれが描かれている。面白いことに、この角はホガースの下絵にあっては単に祭壇を飾る装飾の渦巻に過ぎない。従ってこれはホガースの工夫であり、ブラウンがこれを利用したことは間違いない。また、この目隠しをした女神を女性美を体現しているケイトとすれば、右側の若い男性はニコラスであり、左側の女性はニクルビィ夫人となろう。

左右の竹馬に乗った道化は一方は笑い、一方は泣いていて、幸・不幸を示している。これは『マーティン・チャズルウィット』、『ドンビー父子』の分冊表紙絵にも応用されている。下辺部には、頬かぶりをした中年男性がこわごわ沼地を渡っている。兩岸にはたいして役にも立たない明りをかかげた小鬼たちがころぶのを楽しむかのようにからかっている。J. A. ハマートンはこれをスクウィアズ校長としているが、スタイグはラルフとしている。年齢だけからすれば校長がより近いといえるが、物語の流れからすればラルフの方がはるかに重要であり、年齢もラルフのやや若い時期を示しているとすれば辻つまが合う。確固たる信念を持ち、目先のきくかに見えるラルフもスマイクがわが子であることを見抜けず、仕事も挫折したことを考えればやはり沼地を杖をついて歩くようなものであったろう。なお、スタイグはほほかぶりは背後の教会を無視する姿勢の表現であるとしている。

この作品の挿絵に関して、二人の研究者の意見がくい違うのは興味深い。F. G. キトン は‘The “Nickleby” illustrations are, as a whole, very successful;’¹¹⁾といい、M. スタイグは‘Despite the general weakness of the *Nickleby* plates, …’¹²⁾としている。第1図に関して、スタイグはラルフ以外活気がなく、紙人形のようなだとしている。確かに、例えば第1図と第2図の人物の配置が酷似しているとか、第32図と第38図の乱闘場面は活気が

あるものの類似性もある。筋とはあまり関係のない第4図、第6図、第31図があったり、感激したり、嘆いたりした時は第20図、第22図、第23図、第28図のように手を挙げて感情を示す。『ピクウィック遺文集』にも背景の人物だが5ヶ所で使用している。感極まれば当然とはいいながら帽子を手にしているのがほとんどなのはやや均一でありすぎる。『ピクウィック遺文集』と比べると活気のない挿絵があるといえる。そうすれば前作が挿話の連続で見せ場が作り易いのに対し、これは一応本格小説であるので、各分冊に必ずしもやま場が巡って来なかったということが言えよう。

しかしながら、第5図「ドゥザボーイ校内の儉約ぶり」、第13図「マンタリーニ女史の店での嫌がらせの専門家たち」、第24図「双方の予期せぬ出会い」、第37図「マンタリーニ氏のなれの果て」、第38図「ドゥザボーイ校の崩壊」といった傑作があることも否定できない。

注

- 1) F. G. Kitton, *Dickens and his Illustrators*. (New York ; AMS Press, 1975) p. 77.
- 2) T. Hatton, *A Bibliographical List*, (London : The Nonesuch Press, 1937) pp. 60~61.
- 3) *Loc. cit.*
- 4) M. Steig, *Dickens and Phiz* (Bloomington & London : Indiana U. P., 1978) p. 42.
- 5) Kitton, p. 76.
- 6) *Loc. cit.*
- 7) *Loc. cit.*
- 8) Charles Dickens, *Nicholas Nickleby* (London : Chapman and Hall, 1839) p. 374.
- 9) Steig p. 47.
- 10) J. A. Hammerton, *The Dickens Picture-Book*, (London : The Educational Book Co. Ltd., 1910) p. 147.
- 11) Kitton, p. 77.
- 12) Steig, p. 43.